座位号：_____

姓名：_____

机密★启用前

2021年4月高等教育自学考试全国统一考试

日语翻译

（课程代码 00601 ）

注意事项：

1. 应考者必须按试题顺序在答题卡（纸）指定位置上作答，答在试卷上无效。
2. 涂写部分、画图部分必须使用2B铅笔，书写部分必须使用黑色字迹签字笔。

一、把下列划线的词译成中文。（本大题共10小题，每小题2分，共20分。）

1. 隣の中学生のいる部屋を作るために、黄色く日に灼けた古畳が不揃いに狭く切られていたからであった。
2. 床の横に違い棚があって、縁と反対の側には一間の押入れがついていました。
3. 薄い青空が高く晴れわたり、そこへ羽毛をぷっと吹き散らしたよう、軽い綿雲が一面に浮かんでいる。
4. 春の気配に敏感なもの、私から見ると、少しせっかちすぎるのではないかとさえ思われるものがある。
5. これでもう何度目かにその半ば傾いたベンチの上に腰掛けたまま、その最後の夏の日のそういう情景をよみ返らせていた。
6. むしろ異常な辛抱強さをもって比較する必要がある。
7. 「しばらく」と声を掛けてもしょんぼりうつむいて黙っている。
8. 並んで歩いている彼女よりも背の低い夫には無頓着そうに、考え事でもしているようである。
9. 最後にパリから、ロンドンへ向い、一年間にわたる長い旅が終わる。
10. 今度は十八番の歌を聞かせよう。

二、把下列词译成中文。（本大题共10小题，每小题2分，共20分）

11. 猿も木から落ちる
12. 泣き面に蜂
13. 目くそ鼻くそを笑う
14. 指をくわえる
15. 首を傾げる
16. 畳の上の水練
17. 落花流水
18. 足を洗う
19. 青天白日
20. 鼻薬を利かせる

三、把下列句子译成中文。（本大题共5小题，每小题3分，共15分）

21. 彼は自分の心が、常になく落ち着く、和らぎ、澄みわたり、そして幸福に浸っていることを感じた。
22. 窓は一つもなかったのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよくさしました。
23. 日曜日のことであったが、いつものように私が遅い朝飯を食べていると、郵便配達夫が小包を配達してきた。
24. 花を美しいと思うのは、尊敬する人や愛する人のそばにいるだけで心が満たされる，その心情に似ている。
25. 不動産の売買契約は、夏のボーナス期を控えた4、5月ごろが一番多く、今年もそろそろ売り出しシーズンを迎える。

四、把下列短文译成中文。（本大题共5小题，每小題5分，共25分）

26. その夜、笹野はなかなか寝つかれなかった。やっと、うとうとしたと思うと、誰かが部屋に忍び込んでくるような気配におびやかされて目を覚ましてしまうのだ。

00601

27. 倉子は廊下を一つ隔てて、北山の事務室の向い側にある八千代新興産業会社にいた。両側に同じ形の事務所の並んでいる長い廊下は暗く、彼が彼女に出会ったり、すれちがったりする時間は、ごく短いものであったので、彼は彼女の顔を細かく観察するというようなことは出来なかった。

28. 大学に入ったといっても、既に父に逆らって家を出ていた私には学資の出るあてはなかった。しいて言えば、母が父に隠れておくってくれる金があるにはあったが、それも当てに出来る金ではなかった。

29. その下宿をやっと探し当てるまで、私は一緒に大学を受けた新野という高等学校で同級の友人のアパートにいた。大学の入学試験が終わっても帰って行く家のない私は、新野のためにアパートを探すということで幾許かの金を新野から貰い、東京に居残った。

30. ある人が「読書はつねにめぐりあいである」という意味のことを書いていますが、これはなかなか面白い言葉です。ここで「めぐりあい」といっているのは、思いがけない時に思いがけない人に出会うという意味です。

五、把下列文章译成中文。（本大题共 2 小题，每小题 10 分，共 20 分）

31. 当社はコットン下着や大口需要があるパーマネント・プレス加工の既製服を輸入したいと思っております。

貴社は上記商品のメーカーであると伺いましたので、CIF 価格、値引き率や船積期などにつき詳細お知らせ願いたく、またパンフレット或いはカタログがあればあわせご提供ください。

ご高配に対し前もってお礼申し上げます。貴社のオファーに対しては誠意をもって検討いたします。

32. どうも、今度の旅は最初から天候のくあいが奇妙だ。悪いと言ってしまえばそれまでだが、いいと思えば本当にくあいよくいっている。第一、きのう東京を立ってきたときからして、かなり強い吹きぶりだった。だが、朝のうちにこれほど強く降ってしまえば、夕方木曽に着くまでにはと思っていると、昼少し前から急に小ぶりになって、まだ雪のある甲斐の山々がそんな雨の中から見え出した時は、何とも言えずすがすがしかった。そうして信濃境にさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすっかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせいか、何か生き生きと蘇ったような色さえ帯びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曽の真っ白な山々がくっきりと見え出してきた。……

その晩、その木曽福島の宿に泊まって、明けがた目を覚まして見ると、思いがけない吹雪だった。